文学のとびらをひらく

日本文学名作事典

SUN LEXICA

森野宗明ほか編著

三省堂

1984 年 5 月 31 日　初版発行

日本文学名作事典

定価 950 円

1984 年 5 月 31 日　第 1 刷発行

編著者© 森野宗明（もりの・むねあき）（代表）

発行者　株式会社 三省堂　代表者 上野久徳

印刷者　三省堂印刷株式会社

発行所　株式会社 三省堂

〒101 東京都千代田区三崎町二丁目 22 番 14 号

電話　編集　(03) 230-9411

販売　(03) 230-9412

総務　(03) 230-9511

振替口座　東京 6-54300

〈レキシカ⑧日本文学・256 pp.〉

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-385-15478-3

文学のとびらをひらく

日本文学名作事典

SUN LEXICA

森野宗明ほか編著

三省堂

編著者●森野宗明（筑波大学教授）
栗坪良樹（青山学院女子短期大学助教授）
鈴木貞美（文芸評論家）
鈴木丹士郎（専修大学教授）
宮腰　賢（東京学芸大学助教授）
山崎一穎（跡見学園女子大学教授）

カバー・中扉●高村智恵子
写真●反町茂雄
高村　規
装丁●高田修地

読者のみなさんへ

名作といわれる文学作品には、それぞれの作者のたどった人生の、さまざまな思いが凝縮されています。そこに描き出される世界は、現実の姿そのものの再現ではなく、新たな光で照らし出し、より深い観点でとらえなおされたものです。作者の悩みや苦しみにも、作者の個人的な体験という枠をこえて、読者にとっても切実な問題として迫ってくるような深まりと普遍性とがあたえられています。

もっとも、作品の受け取り方は読み手によって違ってきます。これはこう読まなければならないということが決まっているわけではありません。読む人ひとりひとりが、作品との出会いの中にどれだけのものを見出しえるか——それが文学作品の可能性であり、また、「読む」という快い緊張をともなった楽しみでもあります。

本書は、わずか二五六ページのささやかな事典ですが、文学の世界へ御案内するガイドとして皆さんのお役に立つことを願っています。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

凡例

(1)本書は、古典から現代にいたる日本文学史上の主要作品一八七編を収めている。（古典四〇編、明治以降の近・現代の作品一四七編）

(2)収録作品は散文に限り、詩歌・俳句などの韻文は除いた。

(3)作品はほぼ年代順に配列し、作品と時代の推移を明らかにした。

(4)各ページは、上段に原文、中段に作品解説と作家紹介、下段に出典・主要著作などのガイドによって構成されている。

(5)原文引用は原則として、口語体のものは現代仮名遣いにした。文語体のものは、旧仮名遣いのままとした。いずれも漢字は新字体にあらためた。また適宜にルビ（振り仮名）を付した。

(6)古典作品に限り、原文に現代語訳を付した。現代語訳は、作家、詩人、文芸評論家の芸術的香りの高い訳を選んだ。該当の既訳のないものについては、解説執筆者が新訳した。

(7)解説は、作品紹介とともに、作品の読みどころ、味わい方に力点をおいた。

(8)解説の末尾に、作者紹介を付した。二カ所以上でとりあげられた作者については、①②の符号を付し、個々の作品の書かれた時代に相応する作者の活動を中心に解説した。

(9)ガイド欄では、いくつかの略号を用いた。

全はその作家の個人全集名。複数あるときは、編集内容に定評のあるもの、現在入手しやすいもの、の観点から選んだ。

選は古典文学のアンソロジーを指し、以下の略号を用いた。

日本古典文学大系（岩波書店）→古典大系

日本古典文学全集（小学館）→古典全集

新潮日本古典集成（新潮社）→古典集成

現は古典の現代語訳のアンソロジーを指す。以下、略号。

日本の古典（河出書房新社）→日本の古典

日本古典文庫（河出書房新社）→古典文庫

日本の古典（世界文化社）→世界文化社版

日本の古典（学習研究社）→学研版

文はその作品の収録文庫名。

他はその作家の、他の主要作品名。

(10)下段には、ガイドとともに、文芸用語、文学思潮に関する用語など、作品理解のためのコラムをもうけた。

(11)作品の選定は、左の六人があたり、解説部分の執筆は、解説文の文末に記名の解説者が執筆した。

森野宗明（筑波大学教授、国語学）

宮腰　賢（東京学芸大学助教授、国語学）

鈴木丹士郎（専修大学教授、国語学）

山崎一穎（跡見女子学園大学教授、近代文学）

栗坪良樹（青山学院短期大学助教授、現代文学）

鈴木貞美（作家・文芸評論家）

目次

古典 11

古事記　福永武彦訳　13
風土記　福永武彦訳　16
日本霊異記　福永武彦訳　17
竹取物語　川端康成訳　18
伊勢物語　中村真一郎訳　20
土佐日記（紀貫之）　池田弥三郎訳　22
落窪物語　24
宇津保物語　25
蜻蛉日記（右大将道綱の母）　室生犀星訳　26
大和物語　28
枕草子（清少納言）　田中澄江訳　29
紫式部日記（紫式部）　森三千代訳　32
源氏物語（紫式部）　谷崎潤一郎・与謝野晶子訳　34
堤中納言物語　中村真一郎訳　38
更級日記（菅原孝標の女）　井上靖訳　39
大鏡　中村真一郎訳　40
今昔物語集・宇治拾遺物語　福永武彦訳　42
方丈記（鴨長明）　佐藤春夫訳　46
保元物語・平治物語　48
平家物語　中山義秀訳　50
歎異抄　野間宏訳　54
十六夜日記（阿仏尼）　55
徒然草（吉田兼好）　佐藤春夫訳　56
太平記　山崎正和訳　58
風姿花伝（世阿弥）　大岡信訳　60
隅田川（謡曲）（観世元雅）　内村直也訳　61

義経記　高木卓訳　62
物くさ太郎（お伽草子）　63
柿山伏（狂言）　窪田啓作訳　64
好色一代男（井原西鶴）　吉行淳之介訳　65
奥の細道（松尾芭蕉）　山本健吉訳　68
曾根崎心中（近松門左衛門）　宇野信夫訳　70

明治期　81

学問のすすめ　福沢諭吉　83
小説神髄・当世書生気質　坪内逍遙　84
あひびき・浮雲　二葉亭四迷　86
風流仏・五重塔　幸田露伴　88
舞姫・即興詩人　森鴎外　90
金色夜叉　尾崎紅葉　93
にごりえ・たけくらべ　樋口一葉　94
耳なし芳一　小泉八雲　96
高野聖　泉鏡花　97
武蔵野　国木田独歩　98

勧進帳（歌舞伎）（並木五瓶）　73
雨月物語（上田秋成）　円地文子訳　74
東海道中膝栗毛（十返舎一九）　伊馬春部訳　76
浮世風呂（式亭三馬）　77
南総里見八犬伝（滝沢馬琴）　78
おらが春（小林一茶）　80

吾輩は猫である・坊っちゃん　夏目漱石　99
野菊の墓　伊藤左千夫　102
破戒・春　島崎藤村　103
蒲団　田山花袋　106
ふらんす物語　永井荷風　107
入江のほとり　正宗白鳥　108
三四郎・門　夏目漱石　109
青年・雁　森鴎外　112
刺青・異端者の悲しみ　谷崎潤一郎　114
遠野物語　柳田国男　116

大正期 117

銀の匙 中勘助 119
阿部一族 森鷗外 120
大菩薩峠 中里介山 122
こころ・道草・明暗 夏目漱石 124
腕くらべ 永井荷風 128
蘭学事始 菊池寛 129
羅生門・地獄変 芥川龍之介 130
城の崎にて・和解・小僧の神様 志賀直哉 132
カインの末裔・或る女 有島武郎 136
子をつれて 葛西善蔵 138
新生 島崎藤村 139
田園の憂鬱・都会の憂鬱 佐藤春夫 140
苦の世界 宇野浩二 142

昭和期 163

河童・歯車・侏儒の言葉 芥川龍之介 165
赤い蠟燭と人魚 小川未明 143
暗夜行路 志賀直哉 144
日輪・蠅 横光利一 146
痴人の愛・春琴抄 谷崎潤一郎 148
冥途 内田百閒 150
一千一秒物語 稲垣足穂 151
友情・愛と死 武者小路実篤 152
少年の死 豊島与志雄 154
伸子 宮本百合子 155
山椒魚・鯉 井伏鱒二 156
檸檬・闇の絵巻 梶井基次郎 158
伊豆の踊子・十六歳の日記 川端康成 160
セメント樽の中の手紙 葉山嘉樹 162
注文の多い料理店・銀河鉄道の夜 宮沢賢治 168

赤穂浪士
押絵と旅する男
上海・機械
放浪記
蟹工船
夜明け前
真知子
ゼーロン
若い人
あにいもうと
美しい村・風立ちぬ
禽獣・雪国
故旧忘れ得べき
濹東綺譚
晩年・お伽草紙
旅愁
母子叙情
宮本武蔵

大仏次郎 170
江戸川乱歩 171
横光利一 172
林芙美子 174
小林多喜二 175
島崎藤村 176
野上弥生子 178
牧野信一 179
石坂洋次郎 180
室生犀星 181
堀辰雄 182
川端康成 184
高見順 186
永井荷風 187
太宰治 188
横光利一 190
岡本かの子 192
吉川英治 193

夫婦善哉
オリンポスの果実
路傍の石
菜穂子
縮図
聖ヨハネ病院にて
細雪
李陵・山月記
堕落論・白痴
暗い絵
ビルマの竪琴
斜陽・人間失格
虫のいろいろ
永遠なる序章
仮面の告白・愛の渇き
夏の花
梨の花
千羽鶴・山の音

織田作之助 194
田中英光 195
山本有三 196
堀辰雄 197
徳田秋声 198
上林暁 199
谷崎潤一郎 200
中島敦 202
坂口安吾 204
野間宏 206
竹山道雄 207
太宰治 208
尾崎一雄 210
椎名麟三 211
三島由紀夫 212
原民喜 214
中野重治 215
川端康成 216

野火・レイテ戦記　大岡昇平　218
ひかりごけ・富士　武田泰淳　220
紫苑物語　石川淳　222
草の花　福永武彦　223
潮騒・金閣寺　三島由紀夫　224
プールサイド小景　庄野潤三　226
太陽の季節　石原慎太郎　227
鍵　谷崎潤一郎　228
若い詩人の肖像　伊藤整　230
楢山節考　深沢七郎　231
裸の王様　開高健　232
飼育　大江健三郎　233
日本文学作品年表　247

天平の甍・しろばんば　井上靖　234
海辺の光景　安岡章太郎　236
死の棘　島尾敏雄　237
楡家の人びと　北杜夫　238
砂の女　安部公房　239
砂の上の植物群　吉行淳之介　240
抱擁家族　小島信夫　241
幻化　梅崎春生　242
黒い雨　井伏鱒二　243
沈黙　遠藤周作　244
四季　中村真一郎　245
死霊　埴谷雄高　246

コラム
太安万侶の墓誌　14
古代の表記法　15
伝奇物語　19
歌物語　21
歌人貫之　23
蜻蛉日記と近現代作家　27
随筆文学　30
王朝サロン　31
日記文学　33
写本　35
源氏物語の現代語訳　36
源氏物語の影響　37

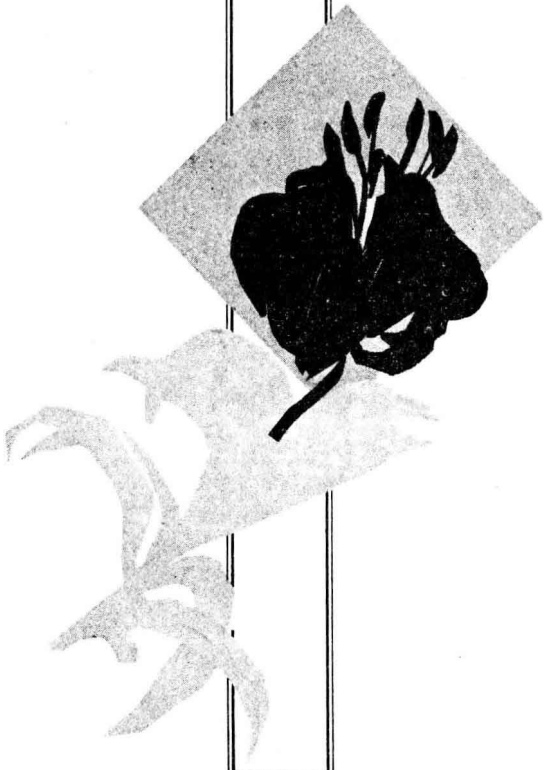
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

鏡物 41
説話と近現代作家 44
説話文学 45
隠者文学 47
平曲 51
宣教師の編んだ『平家物語』 52
陰陽道 53
兼好の見つけた美 57
太平記読み 59
浮世草子 66
好色 67
俳諧 69
近松以後 71
道行き 72
中国小説の影響 75
読者・原稿料 79
近代リアリズム小説 85
言文一致 87
露伴と古典 89
観潮楼 91
鷗外の翻訳 92
一葉の日記 95

漱石と俳句 100
ホトトギス 101
詩から散文へ 104
「文学界」 105
三部作 110
不遇の鷗外 113
耽美主義 115
史伝 121
新聞小説とさし絵 123
不安な人生 125
漱石山脈 126
古典と近代小説 131
「白樺」 133
私小説・心境小説 134
宣言一つ 137
佐藤春夫のエッセイ 141
志賀直哉の影響 145
「文芸時代」 147
怪奇小説 149
新しき村 153
井伏鱒二のユーモア 157
早逝した詩人・作家たち 159

川端康成と作文 161
芥川龍之介の死 166
宮沢賢治の信仰 169
新感覚派 173
馬籠と小諸 177
二十世紀小説 183
川端文学の理想的女性像 185
太宰治と津軽 189
西洋と東洋 191
谷崎潤一郎と古典 201
死後の評価 203
無頼派 205
羞恥と道化 209
行動と肉体 213
美しい日本の私 217
記録文学 219
戦後文学 221
三島由紀夫の美意識 225
女性讃美 229
西域物 235

古典



是に天つ神諸の命以ちて、伊耶那岐命・伊耶那美命、二柱の神に、「是のただよへる国を修め理り固め成せ」と詔りて、天の沼矛を賜ひて、言依さし賜ひき。故、二柱の神、天の浮橋に立たして、其の沼矛を指し下ろして画きたまへば、塩こをろこをろに画き鳴して、引き上げたまふ時、其の矛の末より垂り落つる塩、累なり積もりて島と成りき。是れ淤能碁呂島なり。

◇現代語訳――――――――福永武彦

さて初めに宇宙に現われた三柱の天神は、この時、相談の上、伊邪那岐命と伊邪那美命との二柱の神に、次のような言葉を与えた。

「地上の有様を見るに、まだ脂のように漂っているばかりである。お前たちはかの国を、人の住めるように作りあげよ。」

このように命令して、天沼矛という玉飾を施した美しい矛を授けた。国をつくるという重い役目を負わされたイザナギとイザナミの二柱の神は、天と地との間に懸けられた天浮橋の上に立ち、授けられた矛を、海の上に脂のように漂うものの中へ突き下して、ぐるぐると掻きまぜた。掻きまぜるにつれて、初めは水のよう

序文によれば、『古事記』の成立の事情は、次のとおりである。

壬申の乱の後、皇位を継いだ天武天皇は、諸家に伝わる帝紀（歴代天皇の事跡・系譜などの記録。帝皇の日継ともいう）と本辞（神話・伝説などの伝承。先代の旧辞ともいう）の真実と違い、偽りの多い点を改め、後世に正しく伝えようとして、舎人の稗田阿礼に命じて、誦み習わせた。天武天皇の崩御後、時勢が変わり、その撰録の事業は中絶した。三代後の元明天皇は、天武天皇の遺志を継ぎ、和銅四年（七一一）九月十八日、太安万侶に、阿礼が誦み習った旧辞を撰録し献上するように命じた。中国渡来の漢字しか、文字を持っていなかった当時、その漢字を用いてどう記録するかが課題であったが、音と訓を併用する、注を加えるなどして、ともかくも上・中・下の三巻にまとめあげた。

序文の末尾には、「和銅五年正月廿八日　正五位上勲五等太朝臣安万侶」と、献上の日付、撰録者名が明記されている。

国家組織の根本と天皇政治の基礎を定めようとする意図で撰進された本書は、多くの説話・伝説・歌謡を巧みに構成して、帝紀を中心とする、統一のある「歴史」を物語る。上巻は、神代の伝説で、宇宙の創始から天皇家の始祖とされる神武天皇の誕生まで。中巻は、神武天皇から応神天皇まで。下巻は、仁徳天皇から推古天皇まで。

本書の通読により、宇宙の創始から推古天皇までの「歴史」をたどることができるのであるが、宇宙の創始を語るにしても、神々のしわざとしてではなく、

天地初めて発けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主神。

次に高御産巣日神。次に神産巣日神。此の三柱の神は、並独神と成り坐して、身を隠したまひき。

に薄いものが、次第に膏の煮かたまるように、こおろこおろと凝って行き、やがて海の水からその矛を引き上げると、矛の先を伝わって一滴一滴と潮がしたたり落ちた。そのしたたり落ちた潮が、次第に積もりかたまってついに島となった。これを淤能碁呂島と呼ぶが、これは神々の生んだ島でなく、しぜんと凝りかたまって出来た島という意味である。

国を思ひて歌曰ひたまひしく、
倭は　国のまほろば　たたなづく　青垣
山隠れる　倭しうるはし

とうたひたまひき。又歌曰ひたまひしく、
命の　全けむ人は　畳薦　平群の山の　熊
白樫が葉を　髻華に挿せ　その子

とうたひたまひき。此の歌は国思ひ歌なり。又歌曰ひたまひしく、
愛しけやし　吾家の方よ　雲居立ち来も

とうたひたまひき。此は片歌なり。此の時、御病甚急かになりぬ。爾に御歌曰みしたまひしく
嬢女の　床の辺に　我が置きし　つるぎの
大刀　その大刀はや

のように、神名とその系譜によって示すという方法が採られる。というのは、天の中央で天地を主宰する至上神「天之御中主神」を中心として、生成の霊力をもつ天皇直系の神々につながるいわゆる高天原系神話の至上神「高御産巣日神」と、傍系とみられる出雲系神話の至上神「神産巣日神」の二神が配されて、三極構造の宇宙観が示されているものと考えられる。

このような、神々の名の列挙される箇所は、神名がどのような意味をもつのか、その系譜がどういうことを語ろうとしているのかに留意して読み進めることによって、古代人のものの見方、考え方の一端が浮かびあがる。『古事記』を読むおもしろさの一つがここにある。

引用部の伊耶那岐・伊耶那美の二神は、互いに誘い合うという意味の神名と考えられる男神・女神で、この二神によって日本の国土と神神が生み出される。壮大な国生み、神生みの神話であるが、人間にとって重大な関心事である結婚・出産・死などのありようが、この二柱の神の営みとして、はばかることなく、おおらかに描かれる。

其の島に天降り坐して、天の御柱を見立て、八尋殿を見立てたまひき。是に其の妹伊耶那美命に問ひたまはく、「汝が身は如何か成れる」と問ひたまへば、「吾が身は、成り成りて成り合はざる処一処あり」と答曰へたまひき。爾に伊耶那岐命詔りたまはく、「我が身は、成り成りて成り余れる処一処あり。故、此の吾が身の成り余れる処を以ちて、汝が身の成り合はざる処に刺し塞ぎて、国土を生み成さむと以為ふ。生むこと奈何」とのりたまへば、伊耶那美命、「然善けむ」と答曰へたまひき。爾に伊耶那岐命詔りたまひしく、「然らば吾と汝と是の天の御柱を行き廻り逢ひて、

太安万侶の墓誌　昭和54年（1979）1月20日，奈良市田原町此瀬の茶畑で，太安万侶の遺骨と墓誌などが偶然発見された。墓誌には「左京四条四坊従四位下勲五等太安万侶以癸亥年七月六日卒之　養老七年十二月十五日乙巳」とある。

と歌ひ竟ふる即ち崩りましき。爾に駅使を貢上りき。

◇現代語訳　――――――――――――――――――福永武彦

遠い故郷を偲んで歌をうたった。その歌は、大和は国々の上に秀で立つ国、山は山と重なり合い、眼にしみる青垣をつくっている。この山々に囲まれた、なつかしい故郷の大和ほど、うるわしい国がまたとあろうか。

また、次のような歌をうたった。

命つつがない若者たちよ、畳の薦にへだて編む平群の山に、青々と茂る樫の葉を、手折って挿頭に挿すがよい、挿して楽しく遊ぶがよい。お前たちよ。

この歌は思国歌である。

また次のような歌をうたった。

なつかしい我が家よ、その家のある空の彼方から、見よあのように、雲が立ちのぼって来ることだ。

これは片歌である。

この時、病気が急に重くなった。そこで詠んだ歌は、尾張のミヤズ姫の床のあたりに、私の残して来た吊り佩きの太刀よ、ああその太刀は？

このように歌い終って、たちまち息が絶えてしまった。ヤマトタケルノ命の訃報を伝えて、さっそく早馬の使が都へと送られた。

みとのまぐはひ為む」とのりたまひき。

以下、上巻では、伊耶那岐の子である天照大御神・月読命・須佐之男命による高天原・夜之食国・海原の分治、須佐之男命の反抗、須佐之男命の高天原からの追放、須佐之男命と櫛名田比売との子である須勢理毘売の大国主神との結婚、大国主神による国譲り、天津日高日子番能邇邇芸命の降臨という大きな流れに、さまざまな伝承が統合されている。須佐之男命の八俣の大蛇退治、因幡の素兎、海幸山幸などのよく知られている神話は、この上巻に収められている。

『古事記』は、通読によって「歴史」がたどれるだけでなく、そこに組みこまれた個々の説話・伝説・歌謡をそれぞれに楽しめる。多くの歌謡を配し歌物語風に構成された、中巻の景行天皇の条にある倭建命物語などは、特に著名で、引用部はその死の部分である。

景行天皇の皇子小碓命は、手のつけられない乱暴者であった。天皇は、その勇猛で荒々しい心を恐れて、熊曾征伐を命ずる。命は女装して熊曾建兄弟に近づき、祝宴の席で兄を刺殺、逃げる弟も引き裂く。この時、弟はその武勇を称えて倭建皇子という名を贈る。倭建命は、帰路、出雲建を策略で殺し、大和に帰還する。

景行天皇は、休息の間を与えず、東国征伐を命ずる。この遠征で倭建命は后の弟橘比売命を失い、自身も病気になる。今日の三重県鈴鹿のあたりかと推測される能煩野にまで引き返したが、引用部にみるように、この地で故郷を偲ぶ歌を残して没する。大和から駆けつけ、御陵をつくって嘆き悲しむ后・御子たちの頭上を、命の魂は「八尋白智鳥」になって飛び去る。

（宮腰　賢）

古代の表記法　固有の文字をもたなかった奈良時代の日本人は中国からもたらされた漢字を用いて日本語を書き表わそうとした。たとえば『万葉集』では，ヲトメ(少女)を「処女，未通女，嬬嬬」(漢訳)，「乎等売」(音借)，「尾迹女」(訓借)などとした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com